

平成 21 年 6 月 23 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19830081
 研究課題名（和文） ドイツにおける批判的教育学に関する研究

研究課題名（英文） Research on Critical Pedagogy in German

研究代表者

藤井 佳世（FUJII KAYO）
 鎌倉女子大学・児童学部・講師
 研究者番号：50454153

研究成果の概要：現在を分け持つという立場から考察する新しい批判的教育学は、古典的な批判的教育学とは異なり、真理の門番という位置ではなく、境界から問う不快な位置にとどまることを重視する。このような批判的教育学は、「批判」のとらえ方を更新することによって、現代社会における研究実践としての教育学の一つとなる。批判的教育学は、パーソナルな経験というアクチュアルな現実テーマを取りあげることにより、日常とは別様の「意味地平」を切り開くことが可能になる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	930,000	0	930,000
2008年度	1,130,000	339,000	1,469,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,060,000	339,000	2,399,000

研究分野：教育哲学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：批判的教育学、批判、批判理論、マッシュェライン、ホネット、ドイツ

1. 研究開始当初の背景

（1）1960年代に誕生した批判的（解放的）教育学は、その後、シェファーとシャラーによるコミュニケーション的教育学、ミードやゴッフマンの社会的関係のなかでの自己のなりたちに焦点をあてる相互行為的教育学、エーヴァーマン（Oevermann, U.）の能力理

論を展開する発達教育学、発展理論を志向する教育科学の五つの流れに分化している。これらの教育学は、批判理論との接続を試みることはなかった。1980年代にハーパーマスの理論と教育学の接続を展開したのが、マッシュェライン（Masschelein, J.）である。そのマッシュェラインが、2005年前後から、1980

年代の頃とは異なる新しい批判的教育学を構想している。例えば、マッシュェラインは、2004年に『教育学の批判 批判としての教育学(*Kritik der Paedagogik-Paedagogik als Kritik*, Opladen:Leske und Budrich, 2004.)』を出版し、同年に発表した論文「今日、批判的教育論はどのようにして維持可能なのか? (“How to Conceive of Critical Educational Theory Today?,” *Journal of Philosophy of Education*, 38:3, pp.351-367.)」のなかで、「新しい批判的教育学」として、自らの試みを提示している。また、『フーコーの後に (*Nach Foucault*, VS Verlag fuer Sozialwissenschaften, 2004.)』のなかでも、教育学における批判的研究について言及している。現代社会における批判的教育学の可能性をどのように捉えているかを解明する必要性があった。

(2) 批判的教育学をフランクフルト学派第二世代、第三世代とのつながりから探究している先行研究において、マッシュェラインを中心とする新しい批判的教育学を研究対象としているものは少なく、新しい批判的教育学の解明は、批判的教育学の再構成につながる課題であった。

(3) 国内外の批判的教育学において、フランクフルト学派第三世代の批判理論との関係から探求する研究は、ストヤノフ(Stojanov, K.)の考察があるのみである。ストヤノフは、ホネットの批判理論における内的超越性に焦点をあて、人間形成論を展開しているが、批判と人間に注目をしておらず、批判に注目した批判的教育学の再構成には至っていない。

2. 研究の目的

(1) マッシュェラインを中心とする「新しい批判的教育学」の構想を明らかにする。

新しい批判的教育学における批判の概念

を明らかにする。

「新しい批判的教育学」と「解放的教育学」との比較を通して、「批判」の概念の違いを明確にする。

(2) マッシュェラインを中心とする「新しい批判的教育学」における批判の概念とフランクフルト学派第三世代とよばれるホネット(Honneth, A.)の批判理論における批判の概念の比較を通して、批判的教育学の今日的意義を明らかにし、批判理論との関係から批判的教育学を再び構想する。

3. 研究の方法

(1) 常時、「新しい批判的教育学」と「ホネットを中心とする批判理論」に関する資料収集・分析を行う。

新しい批判的教育学における批判の捉え方を把握するために、*Nach Foucault*に収められている“Das Ethos kritischer Forschung”、*Journal of Philosophy of Education*, Vol.38, No.3, 2004に収められているマッシュェラインの“How to Conceive of Critical Educational Theory Today?”とそれに応答するルーロフ(Ruhloff, J.)とレーマーカーズ(Ramaekers, S.)の論文、*Kritik der Paedagogik - Paedagogik als Kritik*に収められている“Kritik in der Paedagogik: Zum Wandel eines konstitutiven Verhaeltnisses der Paedagogik”を中心に、資料解読を行う。

ホネットの批判理論における批判の概念を明らかにするために、ホネットがパトリギーに着目した点や批判理論としての批判の捉え方をどのように展開したかを把握し、『承認をめぐる闘争』、『正義の他者』*Unsichtbarkeit*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003のなかで論じられているポストモデルネにおける批判理論の可能性を解読することによって、批判と人間の関係について考察する。

(2) 批判的教育学における「批判」の概念に関して、他の研究者と専門的な知識提供、意見交換を行う。

(3) 「批判と人間」の視点から、新しい批判的教育学における批判の概念とホネットの批判理論における批判の概念を比較考察する。

4. 研究成果

(1) 現代社会における批判理論の位置

かつての批判理論は、公的領域に属することが私的領域に侵入してくることに對して、私的領域の自律性を擁護していたが、現在では、「失われゆく公的領域の擁護」(バウマン『個人化社会』)へと変貌している。このように、現代では、批判対象そのものが変化したことにより、批判理論は、批判の思考スタイルそのものの変化が求められている。

現代社会のなかで、批判が可能性をもつためには、次の展開が必要である。それは、開かれた主体、対話的な提示を行う主体、受容主義を中心にする感性をもった主体を形成していくこと(ラッシュ『情報批判論』)である。

(2) 批判理論と批判的教育学の関係

批判的教育学の捉え直しと再構成には、二つの方向性がある。一つは、1970年代のドイツにおいて誕生していた「批判的人間形成論(kritische Bildungstheorie)」を取り入れることによって、批判の新しい形式をうみだし、批判的教育学を新たに構想する方向性である。もう一つは、フーコー(Foucault, M.)の理論などに影響を受け、1960年代に誕生した批判的(解放的)教育学を古典的な批判的教育学と呼び、それとは異なる新しい批判的教育学を構想する方向性である。この方向性の代表的論者が、マッシュェラインである。

(3) 古典的な批判的教育学と新しい批判的教育学の違い

マッシュェラインは、自らの試みを新しい批判的教育学として位置づけ、古典的な批判的教育学とは異なることを示す。その違いとは、新しい批判的教育学はフーコーの理論を受容していることである。

(4) マッシュェラインへのインタビュー内容

ハーバーマスからフーコーへと批判の重心をおおきく変更したのは、ハーバーマスの理論が非常にモダンな理論だと思っからである。その意味では、ホネットも同様である。ホネットの承認は、信頼(trust)とは異なる。にもかかわらず、「批判」にこだわるのは、批判の概念は確かにモダンの概念ではあるが、批判的であることは、開かれている(open)ことであり、そこに批判の魅力がある。ただし、新しい批判的教育学は、歴史的に展開していくのではなく、アクチュアルに展開していく方向性を考えている。フーコーが展開したような系譜学を教育学のなかで展開するつもりはなく、歴史研究よりも現代の教育の解読や教育理論の提示へ向かっている。具体的には、経験のテキストを分析したり、文化に着目していきたい。文化は、薄れ行く境界と浮かび上がる境界がある。そこから、何が変わったのか、などを見ることが重要だと考えている。

(5) 新しい批判的教育学の方向性

主体形成における権力と教育の相互依存の解読

新しい批判的教育学は、フーコーによる主体形成の議論を取り入れることにより、古典的な批判的教育学がどのように近代的な主体形成や教育の発展にかかわったかを歴史的に明らかにすることができる。すなわち、新しい批判的教育学のこれからの仕事は、「権力過程と教育過程の間の相互関連や依存性を明らかにすること」(マッシュェライン)である。このことは、近代社会において批判

的教育学がはたした役割を再考し、さまざまな社会状況のなかで、1960年代に始まった批判的教育学を捉え直すこと、社会・文化・個人が発展する過程を再び語り直すことでもある。

新しい批判的教育学の課題

新しい批判的教育学の課題は、伝統的な批判的教育学が見過ごしてきた教育の発展過程と自己統治の関係からいかに距離をとるかにある。

門番から門の放棄へ 理論の位置変化

古典的な批判的教育学は、理想的な現実を想定し、未だ実現されていない現実として目の前の現実を捉え、その実現にむけて実践することを促してきた。古典的な批判的教育学のフレームワークは仮定的である。フレームワークを支えている原理は、自律的主体であることや自己決定的主体である。このような原理は、一方で近代社会のなかで人々を解放する原理であり、他方で人々を自己コントロールへと導くのである。このような相互依存に自覚的である新しい批判的教育学は、新たな目標を設定することを行わない。1960年代の批判的教育学は、市民を導くと同時に、真理の王国の門番（マッシュェライン）という役割を担っていたが、新しい批判的教育学は、門番として機能しようとする意志に抵抗し、門を閉めなければならないという立場にある。

批判的ポジションの変化について

現在を指導が必要なものとして捉えるということは、今まさに現れている事象を、何かを欠いているものとして、捉えることであり、その欠いている状況から抜け出さなければならない、として捉えるということである。この場合、理論は現在において何が欠けているかを指摘し、それを補うために実践を導いたり、根拠づけたりするような位置におかれ

る。その理論の位置は、現在の外部にある。新しい批判的教育学は、現在の外部に自らを位置づけるのではなく、現在という今まさにおかれている状況から考察することに重点をおいている。

倫理的態度の重要性

新しい批判的教育学にとって、重要な問題は、倫理的態度である。倫理的態度という場合の倫理とは、「ルールや価値や規範の集合」のことではなく、「自己自身に関する関係」のことをさす。このような倫理的態度は、自律や自己反省の実現によって遂行されるのではなく、「批判的距離」をとることによって可能になる。

倫理的態度と不安定さ

新しい批判的教育学にとって重要である倫理的態度は、経験の極限という「パーソナルな経験」として現われる。一人ひとりが何かについて判断する際、それまでの経験の範疇を超える出来事にてあうときに、倫理的態度が要請される。このような倫理的態度が要請される仕事は、「主体をそれ自身から引き裂くような仕事のひとつ」である。なぜなら、倫理的態度は、「拒絶の態度ではなく、外と内との二者択一を脱して、境界に立つ」（フォーコー）からである。

批判することの不快さを引き受ける

新しい批判的教育学は、感受性や受動性にもとづく理論を展望する。ある境界において生成する感受や受動という行為は、倫理的探求や経験において現われる。このような批判は、「わたしたちが参加している現在における実践」であり、「わたしたちの現在の思考や行為に向けられている」（マッシュェライン）批判でもあり、決して快適な位置にはない。エッセイのような、手探りで自らの価値を再定義づけるような行為であり、研究実践である。新しい批判的教育学は、研究者自身もま

た、現在を構成する一員であることをうけいれ、そのなかで思考すること、批判することの不快さとともにあることに重点をおくのである。

批判の変化

新しい批判的教育学は、古典的な批判的教育学が位置づいていた実践を導く「司牧的配慮」をなす理論から不快で倫理的態度において生み出される理論へと向かっている。古典的な批判的教育学における批判とは、理想化された位置からある現実を捉え、そこに欠いている部分を発見し指摘することによって、現実を対象化することである。それに対し、新しい批判的教育学における批判とは、ある状況のなかから思考することであり、それまでの枠組みや境界を再考することである。再考するためにはある理想化された状態が想定されているかもしれないが、新しい批判的教育学は、理想化された状態にみずからを位置づけ、そこから現実を捉えるのではなく、現実のなかに身を沈めることを重視する。そのため、現実に入りながらも距離をとろうとする倫理的態度が新しい批判的教育学にとって重要なことになる。

(6) 批判的教育学とホネット批判理論

フーコーによる批判の概念に影響をうけた新しい批判的教育学は、批判的態度を近代化の過程とともに誕生したこととして捉える。近代化とともに進展してきた統治は、一方で権力にもとづく巧みな人間形成を促してきたが他方で「そこからのがれること」を考える批判的態度を生んできたからである。このように、新しい批判的教育学における「批判」は、独立した自律的な行為として捉えられることではなく、他律的で依存的なこととして捉えられる。このような「批判」は、ホネットが論じている、日常を現在とは異なった層で提示する「意味地平を切り開く」批

判と重なる。承認論を展開するホネットは言語化以前における日常のかかわりや道徳的経験、アイデンティティ形成に焦点をあてており、自己の形成過程における〈存在の否定〉に批判のポテンシャルを見出している。この〈存在の否定〉が統治から逃れることへの回路として位置づく。

(7) 批判と人間の関係

新しい批判的教育学と批判理論の接点は、パーソナルな経験を重視することにある。例えば、新しい批判的教育学は、現在を分け持つという経験から批判的態度を捉える。さらに、経験的テキストを分析対象にすることを提案している。ホネット批判理論は、存在を否定された経験や不正だと感じる感受性を中心に置き、それらを物語的な記述やメタファーを用いながら表現し、現在とは異なる意味連関を再提示する。このように、「批判」を生み出す土壌として、極限的なパーソナルな経験を捉える事が出来る。

(8) 再び構想される批判的教育学

パーソナルな経験や現在を分け持つことから生まれる新しい批判的教育学は、否定的な出来事や研究者自身が巻き込まれていることを考察の対象にすえる。人間形成に織り込まれた隠れた力を顕在化する批判的教育学は、損なわれた承認関係を病理としてとりあげることも可能である。つまり、再び構想された批判的教育学は、人間形成に関する受動的な経験や経験的テキストの解釈を通して、通常は隠されており見えていないもう一つの世界を提示することになる。

(9) 研究成果の意義

意味形成と倫理的態度

マッシュェラインが、フーコーの理論に着目した理由は、教育的行為と倫理的態度の結びつきである。教育関係を相互主観的な関係として捉えるマッシュェラインからみれば、教育

的行為は目的 手段関係において捉えられることではなく、いままさにここで現れているという現在における行為として現れる。そこで営まれる意味形成は、把握されるべき意味を形成していくことではなく、その場のなかで意味が形成されていく行為である。このような意味形成にともなう相互主観的な関係には、現在に身をさらすという倫理的態度が含まれる。この倫理的な教育理解は、教育学研究にとって、次のような展開をもたらす。教育的関係について考える場合、従来においては自己と他者の関係として把握されてきたが、そこに自己自身との関係を含めることにより、感受性や受動性をふくめた教育関係として提示することが可能になる。

教育的行為と自己コントロール

教育という営みは、自己コントロールや自己支配といった自己自身との関係と無縁な営みとして捉えることができない。このような反省と自律の循環作用としての主体形成や教育的行為は、容易に自己支配へとすべりおちるといった教育の捉え方は、教育学研究において、教育的行為を単なる教え、導く行為として捉えることを退け、より営みに即した教育の理解への道を開くことになる。

批判的教育学と臨床教育学の接続 - 「批判的であること」の意味

新しい批判的教育学は、積み重ねてきた教育の理論そのものを考察の対象とすることにより、それまでの理論の蓄積を切り崩し、失い、再び現在から語り直すことになる。この作業は、脆弱な主体、その場でしか起こりえないこと、一回性の出来事、固有の経験から、丁寧に境界を設定する手探りの作業になる。感受性、治療的、他者性、固有性など、現在に巻き込まれた状況から考察を行うことは、新しい「批判」のスタイルの提示でもある。新しい批判的教育学における批判とは、

新たに何かを構築するという批判ではなく、裂け目を現しだすような批判を展開しつづけていくことであるといえる。

現代社会における批判の困難さを踏まえ、たうえで、批判的教育学の可能性を提示した点に意義がある。さらに、批判の概念に着目し、スタヤノフとは異なる視点から批判と人間について考察したことにより、批判理論との接続から構想された批判的教育学という、新たな展望が示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

藤井佳世、「新しい批判的教育学の可能性に関する研究」『鎌倉女子大学学術研究所報』査読無、第9号、2009年、109-114頁

藤井佳世、「新しい批判的教育学の課題と方法」『鎌倉女子大学紀要』査読有、第15号、2008年、23-33頁

藤井佳世、「ハーバーマス理論への批判から < 批判の形式 > を考える」『近代教育フォーラム』査読無、第17号、2008年、159-162頁

〔学会発表〕(計1件)

藤井佳世、「新しい批判的教育学の可能性」J.マッシュェラインの試みを中心に」教育実践学会、2008年

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤井佳世 (FUJII KAYO)
鎌倉女子大学児童学部・講師
研究者番号：50454153